

「腎機能低下患者への薬の使い方」

富野康日己 編

東海大学総合医学研究所

斎 藤 明

最近、順天堂大学医学部腎臓内科の富野康日己教授編集による「腎機能低下患者への薬の使い方」が医学書院から刊行された。腎機能低下患者への薬剤投与は、臨床医にとり日常臨床の中でしばしば遭遇し、薬剤の特徴に応じ、また腎機能低下の段階に応じて投与量と投与方法を変えることを必要とされる、難解な領域の1つと考えられる。

まず、薬剤の排泄部位が腎臓か肝臓により薬剤投与量が異なることになる。肝排泄性薬剤では通常投与量でよいが、腎排泄性の比率が高い場合には、腎機能の低下レベルに応じた投与量の減量が必要となる。蓄積により腎障害を引き起こす薬剤やその他の副作用を引き起こす薬剤があり、その薬剤ごとの有効血中濃度と蓄積による副作用の種類や発現との関連性を知る必要がある。一般に、腎機能低下レベルが大きくなるに従い、腎排泄性薬剤の蓄積が著しくなり、投与量、投与間隔を大きく変

える必要がある。

末期腎不全に至ると、血液透析、腹膜透析などの治療を受けることになる。その際、薬剤の分布領域、分子量や蛋白結合性が、透析による除去率に大きく影響する。蛋白結合率の高い薬剤は、透析による体内からの除去が少なく、蛋白結合率の低く、分子量の高くない薬剤は透析により6～7割を喪失することになる。適正な投与にはそれらの基礎知識が不可欠である。

本書では、総論として、中毒性腎障害、造影剤による腎障害、腎機能の程度に従った薬物療法、腎臓の構造・機能と薬物排泄、腎機能低下時の薬剤投与設計などの基礎がわかりやすく解説されている。また、各論において感染症治療薬（抗菌薬、抗真菌薬、抗ウイルス薬など）および呼吸器疾患治療薬、循環器疾患治療薬、消化器疾患治療薬、精神・神経疾患治療薬、血液疾患、内分泌・代謝疾患治療薬、抗炎症薬、抗リウマ

チ薬、鎮痛薬、造影剤、診断用薬、その他の薬剤について、具体的に100種類以上の薬剤を挙げて、代表的商品名、剤形、適応、常用量、腎排泄率、主な類似薬、腎機能低下時の処方例、腎機能低下時の副作用・相互作用などにつき、わかりやすく、コンパクトにまとめられている。さらに、薬剤ごとに腎機能低下患者への投与時のワンポイントアドバイスを示し、注意点を喚起している点が魅力である。

本書は、臨床家が日常診療室の傍らに置いて、または白衣のポケットに入れて、治療の合間に参考にすることに相応しい治療マニュアルである。多くの臨床家の腎機能低下患者診療に大いに役立つものと確信する。

● B6変型 頁292 2002 定価
(本体3,800円+税) 送料実費

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)